インセンティブ と 経済学的思考

「経済学って何？どんな勉強するの？」という質問にうまく答えられず、口ごもってしまう経済学部の受験生や新入生は意外と多いはずです。でも考えてもみてください。受験勉強、とても大変ですよね。また、私立大学だと 4 年間で平均約 400 万円の学費、めちゃくちゃ高いですよね。しかも、大学に進学せず高卒時点で働き始めれば、4 年間で平均 1000 万円以上は稼げるはずです。大変な労力や費用をかけて進学するのに、そんな単純な質問に答えられないのって、さすがにマズいと思いませんか？経済学の大まかなイメージをつかみ、入学後も学

佐藤 敦紘
Sato Atsuhiro

[研究テーマ]
応用ミクロ経済学
E-mail atsato @ mail.doshisha.ac.jp

問に誠実に向き合い続けるためにも、ここでは「インセンティブ」という言葉から経済学を考えてみましょう。

経済学って何？

経済学の定義にはいろいろありますが、最も有名なものは「様々な用途を持つ希少性のある資源と目的との間の関係としての人間行動を研究する科学」でしょう。これ、分かりますか？「なんのこっちゃ分からん」というのが正直な反応でしょう。それもそのはず、この定義は経済学をある程度学んだ人に向けたもので、初学者がぱっと見で分かるものではありません。経済学をもっと分かりやすく、身近に感じることができ、しかも端的に説明したものはないでしょうか。実はそれにもいろいろあるのですが、私には「インセンティブの学問」という答えが一番しっくりきます。インセンティブは人々が行動を選択する理由などを意味する言葉で、たとえば「地下鉄駅直結というアクセスの良さは、私が同志社を志望するインセンティブのひとつです」というように、今や日常的に用いられています。では、なぜ経済学はインセンティブの学問と呼ばれるのでしょうか。何かと問われることの多い経済学と経営学の違いを考えれば、その理由が明らかになるはずです。

経済学と経営学の違いは、それぞれが分析の対象とするものと、それぞれの分析の方法論の両面から語ることができます。まずは経営学ですが、分析の対象は企業経営に関する様々な問題につきます。また、それを分析す

るための方法論はというと、会計学、統計学、経済学、社会学、法学、心理学など様々なものがあります。そして、経営学の主眼はどちらかというと、企業経営に関する様々な問題という対象です。他方で経済学が対象とするのは社会現象すべてです。また、社会現象をインセンティブの面から説明するという独自の方法論があります。そして、経済学の主眼はインセンティブの考察という方法論であり、そこが経営学とは大きく異なる点です。したがって、経済学と一見関係なさそうな結婚や教育などの社会現象であっても、個人や集団のインセンティブと関連させて「晩婚化が進む理由」や「少人数学級が学力に及ぼす影響」などを考えられれば、それはもう経済学なのです。

経済学を学ぶとどうなる？

　様々な社会現象をインセンティブから説明することは一般に「経済学的思考」とも呼ばれ、それを身に付けることこそが経済学を学ぶ意義と言えます。では、経済学的思考を身に付ければ将来どんな役に立つでしょうか。それを説明する前に、海外で起きた話をひとつ取り上げます。保護者のお迎えが遅いことに困っていたある保育園が、もっと早く子供を迎えに来てもらうために、時間内に来られなかった保護者に罰金の支払いを課しました。その結果、期待した結果とは反対に、保護者のお迎えは以前にも増して遅くなってしまいました。これは、それまで「遅れては保育園に申し訳ない」という規範や

モラルのもとで行動していた保護者のインセンティブが歪められ、「罰金を払えば遅くなってもいいのだろう」というものに変化したからだと考えられています。この話の教訓は、人々がどのようなインセンティブを持っていて、それが制度や政策によってどのように変化し、社会にどのような影響を及ぼすかを見誤ると、取り返しのつかない事態になりうるということです。

インセンティブについて考える経済学的思考の重要性をお分かりいただけたでしょうか。方法論としての経済学をしっかり学び、インセンティブについて考える経済学的思考を身に付ければ、より広い視野で様々な現象に対する人々の意思決定にまで踏み込んで考えられるようになるはずです。ただし、経済学的思考は簡単に身に付くものではありません。社会に出てから「あのときもっと勉強しておけばよかった」と後悔しないためにも、じっくりと学ぶことができる大学生の間に経済学の基礎はもちろん、それを応用した様々なトピックに触れてほしいと願っています。